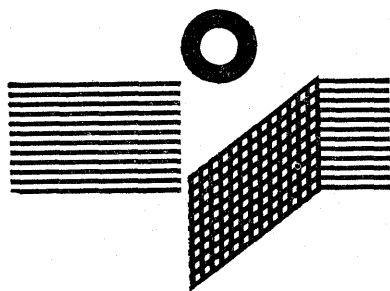


近代短歌に現われた子ども

(十)



大塚
雅彦

(19)^み
三ヶ島じまよし葎子

葎子は本名よし、明治十九年、埼玉県入間郡三ヶ島村（現所沢市）堀之内に小学校長の娘として生まれた。家は代々神職であった。異母弟に飄飄たる持味で知られた異色俳優の左卜全（本名三ヶ島一郎、昭和46年没）がある。長じて埼玉女子師範に入學したが、胸を病み退学、癒えて東京府下の小学校代用教員となる。大正三年退職して倉片寛一と結婚し、一女みなみを生んだ。昭和二年脳溢血で死去、四十二才であった。

彼女は明治四十一年から「女子文壇」に短歌や小品文を投稿していたが、四十二年に新詩社に入り「スバル」に短歌を発表、続いて「創作」「地方婦人」等にも作品を寄せる。四十四年「青鞥」が創

刊されるや同人となり、同誌にも短歌を続載した。大正四年頃には「ホトトギス」「早稲田文学」等に小説も発表している。新詩社では原阿佐緒と親しく、共に将来を

嘱望されたが、同じように大正五年「アララギ」に転じて、葎子は島木赤彦に師事するに至った。歌風も浪漫的詠風から写実的手法に変わっていった。大正十年阿佐緒と石原純の恋愛事件がマスコミをにぎわすや、阿佐緒のために弁ずる一文を「婦人公論」に公にし、これが島木赤彦の怒りにふれて破門された。その後、古泉千樫の門に入り、大正十三年「日光」創刊されるや千樫と共に同人となり、同誌に作品を発表して歿年に至った。歌集に『吾木香』(大正10)があり、歿後、『三ヶ島葎子全歌集』(昭和9)、『三ヶ島葎子歌集』(創元選書、昭和23)等が刊行されている。なお最近、葎子の一女倉片みなみ氏(歌人)の編に成る『三ヶ島葎子日記』上・下(昭56・4)や『三ヶ島葎子往復書簡抄』(昭57・10)等が刊行されて、この歌人の人柄と伝記を知るのに便利となった。但し、日記は大正九年六月で終っていて、「理由は全く

不明」(『三ヶ島葎子日記』倉片みなみ「あとがき」)だが、その後の最晩年の部分がかかれていないらしいのが残念である。

葎子の歌は写実的になってからのものにすぐれたものが多く、生活は貧しくまた肺患に苦しみ、夫の単身赴任や、夫の愛人との同居に悩んだりして「苦悩に続く苦悩の一生」(『三ヶ島葎子歌集』橋本徳寿「解説」)であったが、その生活を豊かな内省を伴って抒情した真実感に溢れる作品が多く、極めて純度の高い、いかにも女性らしいものである。また、その特色は「独りつぶやき、ノートに書きつけて独りなぐさめている独詠的なところにある」(橋本、前掲文)といわれ、人柄の良さを反映し、陋巷につつましく自己を見つめて生きてきた一人の庶民的な女性像を示現している。特に「わが子を詠んだ歌は数も非常に多く、佳作も数え切れない。……吾が子を詠むときは常に全身をもって直截に詠っている」(柘本良他三氏著『三ヶ島葎子研究』昭51・2)のである。

①疲れはて歌も書きえぬ憂き身よりうれしや乳のほと

ばしること

② ぶり仰げば銀杏の大木芽をふけり子にかくれまはる
その木のもとを

③ 張物をみななしをへて心すがし吾子のをりなば遊び
やらんを

④ 先生の話なかばにいたづらをはじめし吾子をただに
まもれり

⑤ 吾子が持つもやひの傘にわが濡れず買物もみな吾子
が持ちたり

①は大正四年作。霞子は前年の年末に長女みなみを生んだ。この頃、東京府下の巢鴨に住んでいた。三十才近くになって初子を得たわけだが、歌人としての文学活動をしながら、病弱の身でしかも貧窮の中での育児は楽ではなかったらしい。上句にはその憂苦が出ているが、下句には、そうした心苦の中で母乳が豊かに出ることを率直に喜んでゐる母情が詠出されていて、読者の心をうつつ。この頃の歌に「何よりもわが子のむつき乾けるがうれしき身なり春の日あたり」というのがあり、母として

の素朴な喜びを平明調でうたっているのも微笑ましい。

②は大正七年作。『吾木香』では「冬夜」一連に収録されている。春の陽を浴びつつ、芽吹く大銀杏のもとで子どもとかくれんぼをしている作者が眼に見えるようだ。霞子は弱かったので、吾が子を所沢の舅姑のもとに時々托したらしい。その子どもが自分の処に戻って来た折の作品らしく、同じときに作られたと思われるのに「もの縫へるわがかたわらに紙切りてしばしおとなし日にやけし子は」「よく遊び疲れたる子は眠りたり生れしその日もこの顔なりし」等がある。③は大正九年作。『吾木香』では「起居」一連の中にある。張物を終ったので手があいたから、子どもが居れば今遊んでやりたいものを——というわけで、いかにも幼児を持つ主婦の歌らしく、しみじみとした情感を漂わせている。④は大正十年作。これはまた面白い作品である。父兄会にでも行った折の作か？ いたずらっ子の愛児をはらはらしながら目守っている親の気持がにじみ出ている。⑤は大正十五年作で、もう死の年に近い頃だ。「もやひ」というの

は共同で事をする事である。ここでは相傘であろう。健康の衰えている作者は、たまたま雨に娘と共に外出したのだからか。十二才くらいになっている娘は病母をいたわり、傘も買物も皆自分が持っていたのであろう。最晩年の腹子の姿がしのばれるし、「或る母子像」とでもいいたいような印象的な光景を髣髴させる。

(20) 岡本かの子

かの子は本名カノ、明治二十二年、神奈川県多摩川畔の二子の大地主、大和屋と称される大貫家の長女として、東京・青山の同家の寮で生まれた。生家は幕府御用商も勤める富裕な旧家であった。長じて跡見女学校に入学、明治四十年に卒業。四十三年、画家の岡本一平と結婚、一子太郎を生む。四十四年、平塚雷鳥の招きに応じて「青鞥」に参加、しかし「ついに『青鞥』イデオロギーに盲従し得ず、『青鞥』グループに深入りすることなく終った(岩崎呉夫『芸術餓鬼岡本かの子伝』昭37・8)。昭和四年、夫に従い太郎を携えて外遊、同七年太郎

をパリに残して帰国した。これより先、大正初期頃より仏教に関心を抱き、その後次第に深く仏教を研究するようになった。帰国後は小説に転じ、多くの名作を次々に世に送り作家としての声価を得た。昭和十四年、前年末の脳充血による病臥を続け、二月遂に逝去。五十一才であった。その夫一平との生活はたびたびの危機を迎え、「超常識的な夫婦生活」(瀬戸内晴美)だったといわれるが、自我の強い自己肯定的なかの子を支えた一平の力は大きく、また、かの子自身が始終口にしたエゲリア(永遠に「青春の女」であり、男性に尽きせぬ靈感を与える女)のように、彼女自身が一平にとってエゲリアであったことを、一平も語っている(岡本一平『かの子の記』昭和17・11——初出は「婦人公論」昭14年5月号の「エゲリアとしてのかの子」、なお熊坂敦子編『岡本かの子の世界』昭和51・11にも再録)。彼女は童女のような一面を持ち、情熱的な人間であった。その「山に来て二十日経ぬれどあたたかく我をば抱く一樹だになし」という歌に強く惹かれ、その後、かの子の作品に耽溺し、女子大

の卒業論文にかの子をとりあげるに至ったことを、作家の瀬戸内晴美（寂聴）女史も告白している（瀬戸内『かの子撩乱その後』昭和53・7）。

かの子の文学的素質は、谷崎潤一郎の親友でもあった兄大貫雪之助（晶川）によって養われた。幼時から作歌し、女学校では服部躬治もとほらに手ほどきを受け、在学中に与謝野晶子に逢い、明治三十九年に大貫可能子の名で「明星」に歌を載せ、その後「スバル」に発表を続けた。歌集『かるきねたみ』（大正元）、『愛のなやみ』（大正7）、『浴身』（大正14）等を次々に上梓したが、外遊に際し『わが最終歌集』（昭和4）を刊行して作歌離脱宣言をした。前述の如く帰国後は創作に転じたが、その後も短歌を作り続けたようである。遺歌集『深見草』（一平編、昭和15・9）もある。かの子は自分を三つの瘤を持つ駱駝にたとえた。すなわち短歌・仏教・小説である。いずれにもそのユニークさを示している。歌風は、初期は浪漫的な恋愛感情をこめた新詩社風の抒情であったが、フオービズム（野獣派）風だった時期もあり、後年には宗

教観をにじませた作品も少なからずあり、生命の実相をみつめる趣きを藏している。なお、小説・短歌・仏教論・随筆その他を網羅した『岡本かの子全集』（昭和49、冬樹社）が刊行されている。

①かの子かの子はや泣きやめて淋しげに添ひ臥す難に子守歌せよ

②男の子やもいとけなけれどひとなかにくちをしきこ
と教数あらむ

③子を抱く母のしかばね正眼まよめには視みて停たちがたしただ
に伏しおがむ

④これがそもまことにわれの生める子か泣きわめく子
をつくづくと見る

⑤をみな子のわれに足らはぬ節せつ多し母の名により許せ
よわが子

①は歌集『愛のなやみ』所収。「なげき」一連にある。

初出は「青鞥」第三卷（大正二年）十一号である。「大正二年後半から約一年間は、かの子らの生活で、最も深刻で悲惨な時期にあたる。放蕩にくれていた一平はかの

子を全くかえりみず、電燈さえつかない暗やみの中で太郎をかかえ、かの子は絶望の真ただなかにいた」福田清人・平野睦子『岡本かの子』昭42)。そのような状況で作られたこの作品をふくむ三首は冒頭に「かの子よ」とか「かの子かの子かの子」とか、自分の名を詠みこんでいる珍らしい歌である。そのため当時、思いあがっているとか一種のてらいであるとか、嫌味にとる者も多かった。しかし、錯乱のため神経衰弱状態にあった彼女の絶望的な嘆きのようなものが、このような表現をとらざるを得ないようにさせたのであろう。後に一平が「ひとり寒厨に乳も乏しい孩児なつかを控え、かの女は自分自らに向って歌いかける以外、慰める術がなかった」と、これらの歌を代弁している。泣く子をあやしむながら、自分の方が泣き出してしまふような稚純な母であったといわれるが、全く生活に不器用であった彼女は、こうしたナルシズム的なものによって、辛うじて自己を支えていたのかも知れない。①の三句から四句辺にかけてのやや譬喩的な表現にも、そうしたナルシズム的なものが漂よっ

ている。

②は歌集『浴身』所収。「一年後」という一連の中にあり、「いぢめられ悲しき時は校庭の木馬をひとり打ちたたくとふ」という歌が続いている。これらの作の前の一連に「子を幼稚園にやりけり」の題がある如く、彼女は一人息子の太郎を慶応の幼稚園から普通部に進ませたが、幼いこの少年を寄宿舎に入れて独立心を養わせようとしたのであった。しかし、級友たちにいじめられるかもしれないぬ「いとけない」愛児を想って、やはり悩んだのであった。②の初句の「男の子やも」はいうまでもなく万葉集巻六の九七八番、山上憶良の「土やも空しかるべき……」から発想したのであろう。

③は歌集『浴身』所収。「大震——鎌倉にて遭難——」の題がある一連中の一首。かの子一家は大正十二年のひと夏を鎌倉ですごし、九月一日、東京に帰ろうとしてこの難に遭った。出発が遅れて危うく親子三人命拾いしたわけだが、東京・芝の自宅は焼失していた。この震災一連は、素材が素材だけに彼女の作品としては珍らしくり

アルに詠み据えており、力強い作品が続いている。「慘
たらしさ眼になれたれど子を抱く母のかばねしひた泣か
れけり」等の歌もある。

④も『浴身』所収で「親子因縁」という一連中の歌、

⑤は『わが最終歌集』所収で「わが児に」一連中の作。

共にひとり息子に対する烈しい母情をパッションネットに
詠出していて、いかにもかの子らしい作だ。⑤の「女と
していたらぬ節々の多い母だが、母の名に免じて許して
ほしい」と子に詫げる歌は、彼女の小説「母子叙情」に
描かれた母情と照らし合わせてみるときに、世のひとた
みの母子とは違ったユニークな親子を提示し、母うたと
して異色のものといえるであろう。

(21) 片山廣子

佐佐木信綱門の中ではすぐれた閨秀作家であり、「竹
柏園門下中、最も傑出した女流歌人の一人」（明治書院
版『和歌文学大辞典』〈昭和37・11〉所収、伊藤嘉夫執
筆）といわれながら、その割に知られず、正当な評価を

与えられていないのは片山廣子である。それは「歌壇に
超然として、純粋な歌境に沈潜した」（伊藤、前掲文）
せいであつたかもしれないし、静かであつたかもしれな
い。しかし、私は前から強い関心を持っている作家
なので、ここにとりあげる。

彼女は明治十一年東京・麻布に外交官の娘として生ま
れた。東洋英和女学校に学び、二十一才で片山貞次郎
（官吏、のちに銀行家）に嫁した。昭和三十二年、脳溢
血で死去、七十九才である。彼女は明治二十九年、十九
才で信綱に入門。早くその歌才を認められ、歌集『翡翠
翠』（大正5・3）を刊行したが、その後しばらく歌を
遠ざかり、アイルランドの文学等の訳業に専心して、松
村みね子のペンネームで名訳の名を専らにした。昭和十
年代に再び短歌に戻り、戦後は歌集『野に住みて』（昭
和29・1）を世に送ったが、あまり歌壇には交わらな
かつたようである。歌風はのびやかで、鋭いところを藏し
ながら温雅で、知的な教養を示している。随想集『燈火

節』（昭和29・6）はエッセイストクラブ賞を受けた。他にアイルランド文学訳著の数冊がある。

なお、大正末には軽井沢を中心にして芥川龍之介・堀辰雄と親交を重ね、特に芥川が廣子を恋して詠んだと思われる詩を室生犀星宛書簡に書いたり、旋頭歌を「明星」に発表したりしたので知られている（『ブッククラブ情報』第二巻第一号―昭46・2―所収、吉田精一「芥川龍之介と最後の恋人」参照）。また、廣子の長女総子（ペンネーム宗瑛）が堀辰雄の小説「聖家族」のモデルとして描かれていることも有名。廣子の研究文献としては藤田福夫教授の「金沢大学教育学部紀要」第14号（昭和40・12）所収「片山廣子の作風概観ならびに年譜」及び「金沢大学語学・文学研究」第6号（昭和50・10）所収「増補片山廣子年譜と明治大正期作品抄」や、「心の花」昭57・2号所収、中野菊夫「片山廣子論」等が最も詳しい。

① 幼児は母の心もよむばかりさときまみして我を見つむる

② たゆたはずのぞみ抱きて若き日をのびよと思ふわが

幼児よ

③ 飴うりを子等は追ひゆく秋の日の流るる道にのこる

笛の音

いずれも歌意は明白で、静謐なおちついた調べである。皆、歌集『翡翠』より抄いた。廣子には達吉（明治33年生、昭和20年死去）と前述の総子（現山田姓）の子があるが、「幼児」というのはこの子ども達の幼き日の姿である。

（お茶の水女子大学）

